

令和6年度 後学期  
科目責任者による授業科目の総合評価報告書  
(2学年・4学年必修科目、選択科目)



自治医科大学看護学部

# 目次

## 【2 学年後学期必修科目】

統計学演習  
臨床薬理学  
臨床検査学  
周産期実践看護学Ⅰ  
周産期実践看護学Ⅱ  
小児実践看護学Ⅰ  
小児実践看護学Ⅱ  
成人実践看護学Ⅱ  
成人実践看護学Ⅲ  
老年実践看護学Ⅱ  
老年実践看護学Ⅲ  
生涯発達看護学概論Ⅴ  
日常生活援助実習  
多職種連携論Ⅰ

## 【4 学年後学期必修科目】

看護総合セミナー  
看護トピックス

## 【後学期選択科目】

哲学  
社会言語学  
保健体育  
スペイン語  
文化人類学  
ジェンダー論  
情報学  
がん看護学  
法学（日本国憲法を含む）  
助産学概論  
多職種連携論  
助産学実習  
へき地の生活と看護

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講semester
統計学演習	関山友子	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業科目の評価票の提出は1件であり「定期試験についての説明が早すぎる」とのコメントが書かれてあった。

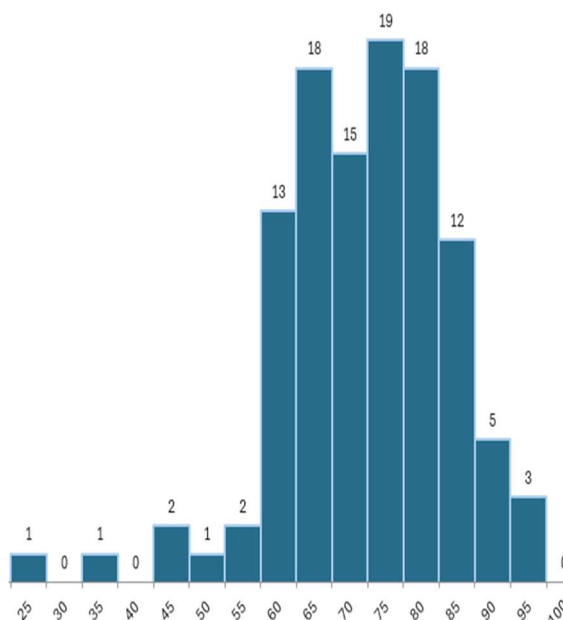
統計学演習は統計学を実際に使いながらの演習のため、統計学と比べて難しいと感じる学生が増えるといったことが予測される。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

定期試験 70%、演習時の課題レポート 15%、学習態度 15% で評価した。

結果は、平均点: 74.0、標準偏差: 11.7、信頼係数: 0.721 であり、再試者は7名であったが、不合格者はいなかった。

再試者7名のうち、統計学の定期試験が69点以下だった者が4名いたことから、理数系の学習が苦手な学生が一定数いることが考えられた。



### 3. 教育方法の評価

14回中6回が講義で、8回が演習である。情報化にともない増えつつあるオープンデータに関する学習内容をどのように盛り込んでいくかといったことや、理数系の学習が苦手な学生への対応を授業内でどの程度盛り込んでいくかといったことについて検討していく必要があると考える。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

すべての演習をすべて完全にアクティブラーニングに移行したいところだが、理数系の学習が苦手な学生のフォロー体制が不十分なため、部分的なアクティブラーニングとなっている。理数系の学習が苦手な学生も巻き込みながらのアクティブラーニングの方法を今後も模索していく。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
臨床薬理学	相澤健一	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本年度は「学生による授業評価票」の回収率が0%であり、正式な評価結果は得られていない。しかし、講義終了後の口頭での意見や自由記載欄のコメント等からは概ね良好な反応が得られた。特に、「スライド資料が整理されており、講義のポイントをつかみやすかった」、「臨床現場に関連する内容が多く、興味深かった」との声が寄せられた。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目では、1) 授業のポイントをつかみやすい講義を行うこと、2) 授業内容に対して学生が興味・関心をもつような内容にすること、3) 学生の積極的な取り組みを促すことを目的として授業を実施した。最終試験および平常点の結果から、これらの目標は概ね達成されたと評価できる。特に、講義中の問いかけや双方向的なやり取りを通じて、学生の主体的な学びを引き出すことができた点は評価に値する。成績分布は以下の通りで、全体として高い学修達成度を示している。

成績分布：優評価 90名、良評価 19名、可評価 1名、不可評価 0名。

### 3. 教育方法の評価

授業では、スライド資料を用いたわかりやすい説明に加え、実際の臨床症例や最新の研究成果を紹介することで、学生の興味・関心を喚起した。さらに、講義中の問いかけを通して学生の積極的な参加を促し、理解の深化を図った。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

次年度は、講義内容についてさらに重点を絞り、重要なポイントが明確になるように講義構成を見直す予定である。また、講義で取り上げる症例をより実臨床に即したものとし、学生の関心を高めるとともに、応用的な思考力を養える内容とすることを検討している。さらに、講義時の説明において図表を効果的に活用し、視覚的に理解しやすい資料作成に努める予定である。加えて、「学生による授業評価票」の回収率向上を目的に、周知や説明方法の工夫を行い、今後の授業改善に活かせる意見収集体制の充実を図る。なお、次年度より科目責任者が交代する予定であり、新体制においてもこれまでの課題を踏まえた改善が継続されることが望まれる。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
臨床検査学	倉科智行	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生からのリアクションペーパーでは、講義内容の難易度、進度や講師の話し方、声の大きさなどの点ではおおむね良好な回答だった。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績はほぼすべての学生が良以上であり、目標の到達はおおむねできていたと考える。

### 3. 教育方法の評価

講義形式で知識を伝達することがベースであり、講義の回数と教育内容のボリュームからは適していると考えられる。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

学生の理解につながる教科書の選定、講義資料のブラッシュアップを行っていく。  
各検査の具体的なイメージをつかみやすい動画教材の収集、作成を図る。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
周産期実践看護学Ⅰ	谷田部典子	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

「学生による授業評価」の提出は0件であり、「授業に関する学生の声」からの意見もなかった。講義後にフィードバックペーパーを配布し、授業方法についての感想や疑問点を記載してもらったが、学習内容に関するものはなかった。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目の評価は、定期試験60%、課題30%、態度10%で行った。A評価84名 B評価21名 C評価5名で再試験受験者は2名(1名は試験当日欠席)であったが、不合格者はいなかった。

フィードバックペーパーから、1年次に履修した生涯発達看護学概論Ⅰの知識を再確認できたという意見が聞かれ、疑問点に関しても次の講義の最初に解説することで理解が得られた。目的である、「周産期（妊娠・分娩（胎児）期）の母児とその家族の健康について理解し、必要な看護を学ぶ」については、おおむね達成できたと考える。

### 3. 教育方法の評価

15回の講義のうち10回が講義形式、2回が看護過程演習、2回が看護技術演習、1回が地域で活動する助産師を非常勤講師とし、講義・演習という形をとり産後の母親たちにインタビューを行った。

講義では、胎児人形やDVDなどの媒体を使用し、内容を実践に近いものとし、演習では、講義で学んだ知識を、看護過程や、技術演習で復習しながらより実践に結び付けることで知識の定着を図った。また、産後の母親たちに妊娠中や分娩時の話をインタビューしたことで、妊娠中の母親の思いや分娩の様子などのイメージ化を図った。

講義後の学生の感想の中で、媒体を使用した講義形式でイメージが付きやすかったことや、地域で活動する助産師の話を聞いて、助産師という仕事に興味を持ったとの声が聞かれ、教育方法として妥当であったと考える。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

講義では寝ていた学生も、演習では積極的に参加し教員に質問したり、課題をしっかりと行っていた姿が見られたため、次年度以降、講義においても、学生が興味をもって積極的に参加できるような形式にする必要がある。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
周産期実践看護学Ⅱ	角川志穂	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学部で実施している授業評価件数は0件であった。講義終了時に実施しているリアクションペーパーでは、毎回学生の学びが多く記載されており、講義中だけでは吸収できない知識については、復習の必要性を感じていた。また、講義終了5分前に実施している知識の確認テストに対する要望が数名から出されており、その時間に学んだ知識の学習に対する意欲的な様子が見られた。講義内容に関する質問が数名から上がっており、講義への関心が伺え、次の講義でフィードバックを行った。

看護過程の展開演習では、他の学科目の課題と重なる時期であり、負担の声が上がっていたが、提出日を調整し、学生が最後まで主体的に取り組めるよう配慮した。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績が良または優であった者が約100名であり、「産褥・新生児期の母子の生理的変化を理解し、生理的変化を促進する看護について説明する」、「産褥・新生児期のハイリスク状態について理解し、その状態にある母子と家族への看護について説明する」という2つの目標は、達成できたと考える。講義・演習を進めていく中で学習内容の理解に時間を要す学生が約1割おり、看護過程の展開において、教員が個別指導を行う体制をとり、目標を到達できるよう支援を行った。

### 3. 教育方法の評価

講義、演習（技術）、看護過程の演習と、一連の流れを関連づけながら学習できるように教授した。技術演習では、臨地スタッフにも指導に加わってもらい、より実践的に演習を行っていくとともに、学生の学びの様子を理解してもらえる時間となった。看護過程の展開の演習時間を後半に6回に実施したが、演習への取り組みに時間を要する学生が多いことから、日程について検討する必要がある。

全体として、産褥期や新生児期のイメージ化が難しく、特に育児をしている母親の生活について理解することが難しい学生が増加している印象を受けた。できるだけDVDといった映像を活用しながら講義を行ったが、さらなる工夫が必要であると考えた。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

看護過程の展開において、さまざまな情報を統合してアセスメントすることが難しい学生が増えており、より丁寧な指導が必要である。講義の組み立てとして、従来看護過程の展開を後半6回に実施してきたが、長期的に指導ができるよう15回の講義の中盤に配置し指導を行っていく。また、1回の講義で学んだ知識が少しずつでも定着するよう、講義の最後に確認テストを取り入れていく。

3年次の実習までに産褥期や新生児期の実際についてイメージ化が図れるよう、映像を活用する他、1日の生活の様子を示すなどの工夫を行い、看護過程の展開につなげていく。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
小児実践看護学Ⅰ	小西克恵	必修	2年次後学期

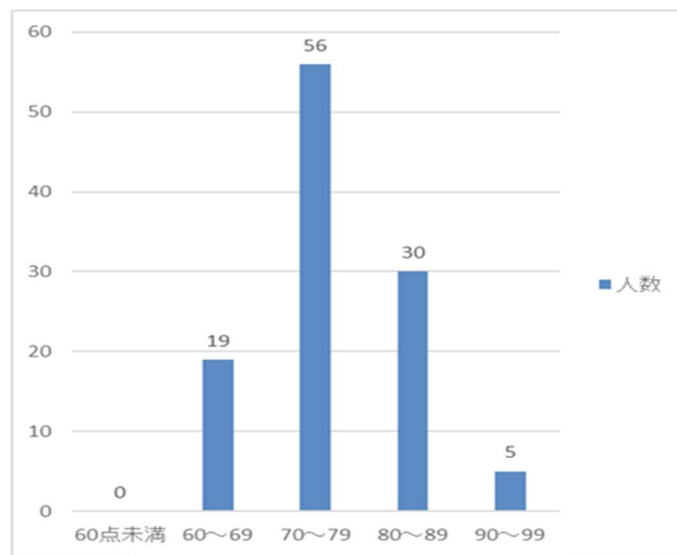
### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

講義中心の科目であり、学生の学習活動は、試験100%で確認した。各講義後のリアクションペーパーは概ね肯定的な意見であった。また、リアクションペーパーに質問等を記載する学生もおり、学習への積極性も感じられた。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

定期試験結果：平均 76.1 点（標準偏差7）であった。

受講した学生全員が、小児保健に関する基礎的な知識を概ね理解できたと考える。



小児実践看護学Ⅰ成績分布

### 3. 教育方法の評価

本科目は、1年次に学習した生涯発達看護学概論Ⅱを学習したことを踏まえて、子どもにとっての最良の健康状態を保持・促進するための看護実践のあり方や、日常的な健康問題を把握し、看護実践方法について講義を中心に学習している。レジュメと教科書を活用し、授業中の集中力を高められ、一定の学習効果が得られたと考える。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

オムニバスで講義を行っている。講義の、重要点が伝わりにくいことがあり、授業内容の焦点化、授業構成や内容の検討を行っている。

教科書の活用は、学生の興味関心を高めることに役立ったと考える。また、事前課題なども活用し、学生が授業に参加していることを実感できるように授業構成を工夫する。



## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
小児実践看護学Ⅱ	飯島早絵	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価は、0件であった。しかしながら、講義終了後に配布していたリアクションペーパーの回答に、多くの学生が講義を通して学んだことや考えたことの記載をしており、関心をもって取り組めていたといえる。また、演習においては、事前課題の提出を演習前に求めたことで、演習に対する自己学習を踏まえた上で学生は演習に参加することができており、演習では互いに声を掛け合いながら積極的に取り組む姿勢がみられた。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

筆記試験 50%、演習態度・演習課題レポート 50%で評価を行った。筆記試験は平均 39.8、標準偏差 3.9、演習は平均 47.0、標準偏差 3.0、総合得点は平均 86.8、標準偏差 5.8 であった。また、最終評価は「優」が 91.8%、「良」が 6.4%、「可」が 1.8% であった。これらより多くの学生が概ね目的・目標に到達したと考える。

### 3. 教育方法の評価

本科目における看護の対象が子どもであり、学生が普段の生活で接する機会の少ない対象であることから、子どもの発達段階を踏まえた関わりを学生がイメージできるよう事例を踏まえて講義、演習を行った。2で示した成績結果を踏まえても、教育方法は概ね適切であったと考えられる。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

授業評価の回収率を上げるよう、最終日に学生が授業評価を行えるような時間を設ける必要がある。また、小児に看護技術を行う際の対応について、学生がより実践に近いものをイメージできるようシミュレーターの活用方法の工夫を検討していく必要がある。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
成人実践看護学Ⅱ	古島幸江	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

コマ毎に学生から授業の受けて表の提出を任意としているが毎コマ 90%を超える提出率で、講義内容に関連した教員の実体験や臨地講師の実体験は理解につながりやすいとの自由記載コメントが多数あった。コマ毎の授業評価として「授業の分かりやすさ」は概ね良好であった。Moodle を活用した学習活動について、定期試験に持ち込み可能とした事後課題や講義内の理解促進や動機付けを意図した小テストの受講は 70～100%の実施率であった一方で、講義内容を補足する動画視聴は約 20%で、エンド・オブ・ライフケアの講義に関連する自己の死生観を問う事前アンケートは約 20%の実施率であった。成績評価に関連しそうな、つまり、学生にとって意味付けできた事前・事後課題の実施率は高い一方で、任意性を前提とした事前・事後課題の実施は低い傾向が考えられた。学生による授業評価は1件の回答かつ、記載されたコメントの性質から他科目への授業評価であると推察される。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目は、以下の2つの到達目標を設定し、授業を展開した。1. 機能障害をもつ成人に対する様々な診療（治療・検査）が与える侵襲性を説明する。2. 侵襲性の高い検査・治療を受ける成人の安全・安楽な療養生生活を維持するために必要な看護を説明する。

到達目標の達成度の評価は、定期試験（100%）による定量的評価を用いた。その成績分布として、「可」評価の学生が最も多く、全体の約 42%を占めた。「優」評価の学生は約 26%、「良」評価の学生は約 33%であり、「可」に次いで多かった。定期試験の正答率や評価分布を分析した結果、「知識そのものを問う問題」の正答率は概ね高いものの、「知識を活用（応用）して解く問題」の正答率が低い傾向が見られた。これにより、形式知を対象への看護にどのように活用するのか、また、状況を正しく解釈し、それに適した行動へと具現化することに課題がある。

### 3. 教育方法の評価

本科目では、講義、Moodle を活用した学習活動、事前・事後課題、小テストなど、多様な教育方法を用いて展開した。しかし、学習活動の実施率にはばらつきがあり、特に動画視聴や自己の死生観を問うアンケート等の任意課題の実施率は低かった。一方で、定期試験に関連する事後課題や小テストは高い実施率を示しており、学生にとって意味づけしやすい活動は積極的に取り組まれる傾向が見られた。また、定期試験の分析では、知識そのものを問う問題の正答率は高かったが、知識を応用して解く問題の正答率が低いことが課題として挙げられた。これにより、知識を実践の場で活用する力の育成が十分でない可能性が示唆された。

本科目は実践看護学であることから、形式知をいかに実践として転用するのかが問われる科目である。そのため、形成評価を工夫し、知識を行動として具現化できる方略を要すると考える。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

以上の課題を踏まえ、知識の定着に加え、その活用力を高め、実践的な看護能力の向上を図ることを目指し、臨床場면을想定した事例学習の強化、形成的評価の見直し、知識理解と知識活用の明確化を図り、教授方略の工夫を行う。

実際の臨床場면을想定した事例状況を設定して問題解決のプロセスを学習できるようにする。このために、学生が状況を的確に判断し、適切な看護実践を導きだせるような教授活動を行う。例えば、定期試験の評価は70%とし、ほか30%はコマ毎の事後学習として自己の思考を表現させるなど記述式・ケーススタディ形式の問いを増やして、知識定着と知識活用の具体が学べる方略を用いる。また、講義中に「知識理解」と「知識活用」を明確に区別できるように示す等、形式知をいかに活用して実践を行うのか、具体的な活用方法を教授する。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
成人実践看護学Ⅲ	長谷川直人	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

手術療法のために入院した成人患者事例について、術後急性期ならびに回復期・慢性期のそれぞれにおいて、担当教員の支援のもとで看護過程を展開した。学生は、全体的に学習課題の明確化や課題の解決に積極的に取り組んでおり、その促進要因として、小グループでのグループワークを主体としたこと、4回の実践演習で模擬患者の協力を得て病棟に準じた学習環境を整えたこと、附属病院の看護スタッフの協力を得て各ベッド1名の指導者を配置したこと等が、効果的であったと考えられた。

授業終了後に協力を依頼した「学生による授業科目の評価票」の回答は0件であったが、演習自己評価票の自己評価欄においては、事例の健康レベルを踏まえた看護過程展開の学びや気づきが記載され、授業の目的や到達目標の達成に向けた学習活動がとられていたことが確認できた。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績分布は、平均84.5点で、81.9%が優、12.7%が良、5.4%が可で、履修生全員が合格した。健康レベルに応じた看護過程における各プロセスの思考がとれているかを重視した評価であり、全体的に到達度は高かった。

一方、急性期における安全と安楽を確保した実践や、健康の回復と悪化を予防するための実践、および回復期・慢性期における患者の健康課題や看護問題の分析は、他の項目よりも平均点が低かったため、科目評価のフィードバックにおいて、復習の視点についてアドバイスした。

### 3. 教育方法の評価

担当教員は、演習における学生の学習活動とその成果物を教材とし、学生の学習経験に即した教授方略をとることを重視して支援した。また、授業開始後は、看護スタッフや模擬患者を含めて、繰り返しFDをする機会を設定し、学生のレディネスや到達度に応じた教育方法を検討し、次回以降の授業に活かせるようにした。これらが、学生の目的・目標の到達度に寄与できたものとする。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

到達度が他よりも低かった評価項目については、演習途中で随時行うミニ講義において、複数の具体例や自作した映像媒体を提示するなど、学生の理解とイメージ化の促進をはかる。また、急性期の実践演習は、学生にとって初めての経験であるために困難さやプレッシャーが大きく、教員や看護スタッフとともにシミュレートする時間を設け、行動計画を一緒に考える時間を充実させる。

本年度も授業のアナウンスや記録用紙の提出等にMoodleを活用したが、演習評価票や課題レポートについても活用できるよう整備を進める。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
老年実践看護学Ⅱ	川上勝	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目では、加齢に伴う健康段階の変化を理解し、老年期の対象に対する看護実践を学ぶことを目的とし授業を展開した。学生から授業評価の提出は無かったが、講義終了後のフィードバックシートから、多くの学生が「講義内容が実践に役立つ」と評価し、特に事例を用いた学習が理解を深めるのに有効であったと回答していた。また、講義内容を踏まえた質問や疑問に関する意見が見られたことから、授業を通して興味関心が高まったと考えられる。今後、更に学びを深めるような補助教材の活用や学習サポート体制の構築を検討する必要があると思われる。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

学生の成績分布を見ると、概ね目標に到達していると判断できる。具体的には、成績の上位層（A・B評価）は約98%を占め、老年期の生活機能レベルの変化や看護実践方法について適切に説明できていることが確認された。一方で、C評価以下の学生（約2%）については、老年期特有の疾患や症状の理解が不足している傾向が見られ、知識の定着が課題となった。

### 3. 教育方法の評価

本年度は、講義・事例検討・グループワークを組み合わせた教育方法を採用した。事例を活用した授業では、学生が具体的な場面を想定しながら学習できる点が好評であった。また、実際の看護場面を想定したシミュレーション演習を取り入れたことにより、老年期の対象への個別的な看護についての理解が深まったと考えられる。しかし、グループワークでは、一部の学生が議論に参加しにくい状況が見受けられ、今後はファシリテーションの工夫が必要である。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

- ・学習支援の強化：専門的な内容が難しいと感じる学生へのサポートとして、補助教材（動画・スライド資料）の提供や、オンラインでの質問対応の場を設ける。
- ・演習時間の確保：実践的な理解を促進するため、シミュレーション演習やケーススタディの時間を増やす。
- ・グループワークの改善：グループ内の役割を明確にし、全員が発言できるような仕組みを導入する。小グループ制の導入や進行役を交代制にするなどの工夫を検討する。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
老年実践看護学Ⅲ	川上勝	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目では、老年期の対象に対するヘルスアセスメントや在宅療養支援のための看護技術を実践的に学ぶことを目的としていた。授業評価の提出がなく、学生多くの学生が「実習や演習を通じて、実践的なスキルを身につけることができた」と回答し、特にシミュレーションを用いた学習が有用であったとの評価が得られた。一方で、「在宅看護技術についての実践機会が少なかった」「家族指導の具体的な方法について、より詳細な学習が必要」との意見もあり、今後の改善が求められる。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

学生の成績分布を見ると、A・B評価の学生が約90%を占め、ヘルスアセスメントや基本的な看護技術については概ね習得できていることが確認された。しかし、C評価以下の学生（約10%）においては、認知機能障害のある対象への看護実践や介護家族への支援に関する理解が不足しており、実践への応用力に課題があることが示唆された。また、提出課題の内容が不十分または未提出が評価に影響した。

### 3. 教育方法の評価

本年度は、演習内に講義を組入れた教育方法を採用した。特に、老年期にある対象の健康状態を適切に評価するためのヘルスアセスメント演習は、学生の理解を深める上で有効であった。また、事例を用いたグループディスカッションを取り入れることで、多職種連携や家族指導についての考察を深める機会となった。

また、演習内容の理解を促進するため授業中だけでなくその前後で課題を提示しており、学習内容の定着に繋がった。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

- ・ 演習内容の拡充：同時期に開講する老年実践看護学Ⅱの内容との関連性を高め、より具体的な演習内容になるよう老年看護過程を展開した事例に基づいた実践内容とする。
- ・ ディスカッション時間の確保：各演習での学びの共有と実践場面への応用につなげるため、グループ単位で振り返りができるよう時間配分する。
- ・ 演習課題（事前・事後）の改善：演習内容に合わせて課題として取り組むべき内容を整理する。評価方法（ルーブリック）や提出期限、提出方法等の周知方法を徹底する。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
生涯発達看護学概論Ⅴ	川野亜津子	必修	2 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目は「リプロダクティブヘルス・ライツおよび女性特有の健康問題に対する看護・支援を学ぶ」という目的および目的に準じた3つの到達目標のもと、学習課題を設定し、15時間の講義を展開している。評価方法は筆記試験70%、事後課題（5回分）30%としているが、特に事後課題では单元ごとに学生が修得した知識を整理できるようなミニテストやワーク、講義内容をリフレクションできるような課題を提示し、学生の知識がより深まり定着できるように、学習活動を支援した。学生からの「女性特有の健康問題について、ライフステージに沿って段階的に理解することができた」、「女性の健康問題に対する看護・支援について、深い学びができた」などといった声から、学生は学習活動が円滑に、効果的に行うことができたと評価できる。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

事後課題（学習目的、課題に沿ったミニテストやワーク、講義内容のリフレクションなど）30%、実技試験70%にて評価を行い、受講者のうち9割程度がAあるいはB評価であった。本科目の目的である「リプロダクティブヘルス・ライツおよび女性特有の健康問題に対する看護・支援を学ぶ」という目的、および目的に準じた3つの到達目標を概ね達成できたと考える。

### 3. 教育方法の評価

評価方法として筆記試験70%、事後課題（5回分）30%としているが、事後課題においては单元ごとに学生が修得した知識を整理できるようなミニテストやワーク、講義内容をリフレクションできるような課題を提示し、学生の知識がより深まり定着できるように、教育方法を工夫した。また講義内容として資料や説明は図やグラフなどを用いて示したり、具体的に知識が深まるように事例を紹介したりなど、学生がイメージしながら知識が定着でき、学んだことを振り返り考えたり、看護へ応用できるように工夫した。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

前年度より新カリキュラムとなり、4年生受講であったものから2年生が受講対象者となった。周産期実践看護学Ⅰは履修済みであるが、周産期実践看護学Ⅱは履修途中（本科目と並行して履修する）、周産期看護実習は未履修であるため、学生が本科目の内容をイメージし、理解しやすいようにさらに資料や講義内容を工夫する必要がある。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
日常生活援助実習	小原泉	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

指示されている健康観察や昼食中の黙食を確実に実施できない学生が散見されたが、感染症と診断されて欠席する学生はおらず、欠席による出席日数が課題となる学生は生じなかった。

実習の事前課題は、取り組んでいない課題や完成度の低い課題がある学生も少なくなく、実習の準備状態は個人差が大きかった。

実習中、ヒヤリハット報告が6件あり、行動調整範囲外で学生の単独行動が4件、記録の一次的行方不明1件、受け持ち以外の患者のカルテ閲覧1件で、前年度1件より増加した。その背景として、注意力低下、行動調整の意味の理解不足、疑問に感じることなく自己判断で行動してしまう傾向が考えられた。

前年度に認めた学生としての基本的学習態度(挨拶等)に関する課題は、指導を強化した影響もあるのか、特に問題となることはなかった。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

A評価97名、B評価11名、C評価2名で、前年のA評価81名、B評価22名、C評価2名と比べてA評価の学生が増加した。全体として、実習の目的・目標は到達できているといえる。この背景として、新カリ2年目となり、学内実習日を活用して、到達度の低い学生を早期発見して指導を強化できたことが一定の効果を生んだと考えられる。

### 3. 教育方法の評価

前述のように実習目標の到達状況は良好であり、病棟実習と学内実習のバランスは適切と考えることから、実習スケジュールは変更しない。

学生数が110名と多い学年であったため、実習病棟を1つ増やして8つの実習グループを編成した。そのため、例年より多くの教員が必要で、臨時教員が入る病棟では科目責任者が直接間接的に学生指導に関わったが、この病棟が2年生の実習受け入れが久しぶりだったこともあってか、実習指導者と教員の役割の実際に関して実習開始後に調整を要する場面があった。

附属病院の病床再編により、受け持ち患者確保への影響が懸念されたが、実習期間途中での受け持ち患者変更は例年並みであり、実習への支障は少なかった。

前年度の学生の意見を受けて、学年全体で実習記録提出期限を病棟実習終了2日後に変更した結果、学生から特に不公平感の訴えはなかった。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

ヒヤリハット報告が増え、注意力低下、行動調整の意味の理解不足、疑問に感じることなく自己判断で行動してしまう傾向を認めていることから、安全な実習の実施を最優先事項とする。そのための対策は以下の通りである。①学生数は前年度より減であるが実習病棟は同じとし、8つの実習グループを編成できるよう臨時教員を確保する。8つの実習グループが編成できると1グループあたりの学生数は6～7名となり、学生に目が行き届きやすくなる。②受け持ち患者に対する日常生活援助は、必ずしも学生が全て経験する必要はなく、学生の準備状況に合わせて学習内容を調整して、学生に過度な負荷がかかることによる注意力低下や自己判断による行動を防ぐ。③病棟師長や実習指導者だけではなく、病棟の看護師やナースエイドも学生の状況を理解してもらい、必要時協力が得られるよう働きかける。④2年生の実習指導受け入れ歴が浅い病棟では、科目責任者も同行して打ち合わせを特に入念に行う。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
多職種連携論Ⅰ	渡邊賢治	必修	2年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

講義をふまえた個人の学びをもちより、小グループごとに設定したテーマのもとで学習内容を整理する共同学習を行った。また、整理した学習内容の発表、ならびに、類似性・相違性から理解を深める全体共有・討議を行った。さらに、これらの学習活動（プロセス）を表現するレポートを提出した。

グループ内で分担した役割（資料調査など）を全うして共同学習に参画する学生が多く見られたが、個人学習の学びの共有から学習目標の到達につながる学習計画を立案・遂行できず、教員からの多くのファシリテートを要するグループが少なくなかった。

本科目への「学生による授業科目の評価票」の回答は1件であった。学習活動の分析は困難と考えるが、自由記述において、チームメンバーそれぞれの学習課題への取り組み方（程度）を目にするなかで共同学習としての成果が求められる難しさを感じたという声が寄せられた。連携して成果を出す学習活動（プロセス）への難しさを実感できた、という面では、本科目の狙いとする学習活動がなされていたと示唆された。また、講義のリアクションペーパーには肯定的な意見が多く、学習方法の理解につながったことが確認された。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績分布は、平均92.5点で、95.5%が優、4.5%が良となり、履修生全員が合格した。多職種連携・協働上の課題をとらえるまでの思考過程を重視した評価であり、全体的に到達度は高かった。

一方、様々な医療現場の連携・協働の分析において、連携・協働上の課題が生じる背景と期待される看護職の役割との間の一貫性の乏しいレポートや、一つひとつの職種の専門性の違いに十分言及できていないレポートもみられたため、科目評価のフィードバック（講評）においてアドバイスした。

### 3. 教育方法の評価

昨年度の科目評価に基づき、教材とする提示内容を整理し、説明の明示化を図った。多職種連携・協働上の課題を捉えやすいよう、講義中に重点的に取り上げるモデル例を絞り、共同学習前のオリエンテーションでは学習上必要となる思考過程を焦点化して繰り返し動機づけした。また、教員用のファシリテート資料を作成し、学生が多職種連携・協働上の課題をとらえる上で効果的な動機づけの方法の共有を図った。

今年度も多くの学生が学習目的・目標を高いレベルで到達した。しかし、多くの小グループにおいて共同学習のための学習計画の立案・遂行に教員の強力なファシリテートを要した状況があり、また、最終成果物であるレポートでは他職種の専門性の違いがもたらす連携・協働への影響の分析が乏しいものがみられた。

本科目を担当した教員とのFDでは、学生の自立した学習のためにはより明示的な学習課題の提示が必要であるとの認識を確認した。また、科目の学習目的をふまえたとき小グループのテーマは医療者間の連携、もしくは、病院組織内でのチーム医療の内容となるよう教員からの方向づけが必要であることを確認した。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

引き続き、提示する学習課題の明示化を図る。全体発表用のパワーポイントのひな形にガイドを追記し、オリエンテーション時は明示的な説明を実施する。また、より多くの学生がレポートへの記述を通して学習目的・目標の達成に必要な学習活動を図れるよう、レポートのレイアウトやガイドを工夫する。



## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護総合セミナー	塚本友栄	必修	4年次通年

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

共通の授業評価票による授業評価を実施し、28名から提出があった（回収率 26.4%）。26名（92.9%）が「熱心にプレゼンテーションのための準備を行った」、27名（96.4%）が「積極的に議論に参加した」と回答し、学生は意欲的に学習活動に取り組んでいたと推察できる。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

総合評価がA以上の学生が9割を占め、例年通り高い目標到達度を維持できた。4つの目標のうち目標4「看護実践方法の改善課題を整理し、解決するための方法を考える」はB評価が21.7%を占め、他3つの目標と比較しA評価の割合が少なかった。課題の整理・分析と比べ、解決するための方法を検討することは学生にとって難易度が高いと考えられる。

### 3. 教育方法の評価

グループ間・教員間の指導方法の違い等、教育方法に対する不平・不満を示す自由記載はなかった。また、学生個々の関心ある課題にそったグループ編成であること、グループ学習のみならず個別指導を組み合わせ、個別の状況に応じた指導が行われていることが、目標到達度の高さにつながっていると考えられる。

しかし、授業評価票の回収率が3割を切っており、学生による評価をとらえきれていない。このため教育方法を適正に評価できていない可能性がある。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

次年度から新カリキュラムによる「看護総合セミナー」が始まる。授業評価をよりしっかりと行っていく必要がある。研究レポート提出後・授業後に拘らず、4年次の学生にとって負担の少ない時期に授業評価の提出を促し、回収率を高め、授業に対するより多くの学生の声を得ることが課題である。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護トピックス	小原泉	必修	4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価の結果からも、全体的に学生は授業の目的や進め方、評価方法を理解し、興味・関心をもって学習に取り組んでいたといえる。

R4 年度に認められた全体講義における欠席者の散見も R5 年度よりさらに改善され、オリエンテーションや全体講義の評価にリアクションペーパーを含めたことが功を奏していると考えられる。

学科別授業については、グループ分けに関して特に不満の声はきかれていない。一部の学生から、学習課題の量の学科目による違いに関して意見が出ているが、学科目別授業の評価平均点はいずれの学科目でも 8 割を超えていることから、学生が到達可能な目標が設定され、そのために必要な課題が提示されたといえる。

学会参加については、昨年度までにみられた単なる e-learning 教材視聴といった学生はおらず、学習素材として適当な学会等に参加していた。参加形式は「現地参加を推奨、オンライン参加も認める」と説明していたが、オンデマンド参加していた学生が後から判明し、学生はオンライン参加とオンデマンド参加の違いを理解していなかったことが確認された。ガイダンス不足が一因であるため、そのまま様子を見ることとした結果、約 16% がオンデマンドでの参加となった。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

履修者 106 名のうち、90 点台 95 名、80 点台 8 名、70 点台 2 名、60 点台 1 名で、前年度の成績分布（90 点台 85 名、80 点台 14 名、70 点台 1 名、60 点台 1 名）に比べて、90 点台の者が増加した。

全体的に高得点者が多く、目的・目標は全体的には到達できていると考えられる。70 点台の学生 2 名は、学会参加報告に不備があったためにレポートが採点対象とならなかったこと、60 点台の学生 1 名は、学科目別授業の課題に未提出物があったことが、低得点の原因となっている。全体的に R5 年度よりも高得点者が多い背景としては、学科目別授業で全員が満点の学科目があることや、学会参加レポートの評価基準変更によりレポートの内容が改善したこと、全体講義のリアクションペーパーの内容もきちんと記載されたものが増えたことが考えられる。

### 3. 教育方法の評価

学習目標の到達状況や学生の授業評価から、用いている教育方法について、特に改善を要する点は認めない。評価スケジュールも、国家試験出願前に単位取得見込みが確認できるよう、全体講義の最終回を 11 月 15 日（金）とし、学会等参加後のレポートの提出期限も 2 週間程度早めて 11 月 5 日（火）としたことは、妥当であった。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

- ① 学会の参加形式は「現地参加を推奨、オンライン参加も認める」ということで適切と考えるが、オンライン参加とオンデマンド参加の違いを理解していない学生が少なからず存在することが判明したため、ガイダンスで十分に説明する。学会参加報告の不備により評価が低くなる学生がいることから、学会参加報告方法についても、ガイダンスで具体的に説明する。
- ② 学科目別授業も全体講義も、後学期に予定できない場合は前学期 6 月以降に予定することを各学科目の責任教員に周知するとともに、学科目責任者も確認していただくよう依頼する。365 時間割で「看護総合セミナー」と入っている時間を学科目別授業で使わざるをえない場合には、十分に調整を行うことも依頼する。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
哲学	中山純一	選択	1,2 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

授業形態は講義であったが、履修者数に合わせて適宜、演習形式を用いた。授業時間冒頭でレジュメを用いた導入授業を行い、後半で質疑応答の時間を設けた。講義と演習のハイブリット型の授業を展開した。こうした授業運営によって、哲学の諸概念（アイデア論や観念など）を学生自身の具体的な体験から思考してもらい、哲学の内容を実感として理解できるよう工夫した。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

学習目標の到達については、毎授業時の小アンケートで測った。導入授業を聴きながら記入している学生や、質疑応答の時間に記入している学生、そして授業後に残って記入している学生とそれぞれ対応が分かれてしまった。これに関して、授業冒頭で記入の仕方について伝達し、学生ごとに不公平感が生じないように改善していきたい。

### 3. 教育方法の評価

講義形式での内容の一方的な伝達ではなく、自分で考え質問を発する機会を設ける双方向型授業をこころがけた。履修人数が10名以下ということもあり、この形式での授業運営に問題は生じなかった。また、よく発言する学生と、あまり発言しない学生がはっきりと分かれてしまったため、導入授業時の具体例の提示や、質疑応答時の問いの内容の設定などを工夫し、発言しやすいものへと変更するの必要を感じた。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

10名以上履修した年度では、質疑応答をグループワークへと変更した経験がある。本年度は演習形式で授業を行えたが、履修人数に応じて授業運営のあり方を柔軟に設定することの意義を認識した。グループごとに話し合いを行ってもらうさいには、机間を巡回しながらワークの補助を行う必要がある。学生一人一人にとって学びを深められるよう、導入の内容、形式、そしてテーマ設定などをブラッシュアップすることが大切であると認識した。また、90分授業を7回行うので、各回の授業テーマのエッセンスを授業冒頭で、簡潔な仕方で提示することも必要だと考える。学生の主体的な学びを促しながら、内容の本質的な理解を目指すよう、本年度の授業のあり方を発展させていきたい。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
社会言語学	鹿野浩子	選択	2,4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

「学生による授業評価」の回収率は0%であった。授業内および授業終了時に行った科目独自のリアクションペーパーによると、ディスカッションが多いことによって多くの意見を共有されたや、コミュニケーションということを科学的な視点で学べたという意見があった。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

人間関係の構築とことばの運用という関係を、男女の会話の構造の異なりや方言の意味や方言話者にもたらす機能を入門書のテキストを基に説明した。何気ない日常のことば使用から会話とことばを考えて貰えるように働きかけた。看護師を目指す学生にとって、患者との会話を大切にそして真摯に考えている姿勢が、ディスカッションやリアクションペーパーから見てとれた。成績分布は受講生全員が優であった。

### 3. 教育方法の評価

学生が興味を持てるような会話の事例をもとに授業を進めていき、多くの時間をディスカッションに費やした。受け身の授業とならないように、授業の読み物は、担当者を決めて、要約をさせたり、自分の意見も発表させるなどの工夫をした。また、全員が授業に参加できるように、教員中心の授業ではなく学生に問題提起を行わせた。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

個性豊かな学生が増えていくことを考え、学生の興味関心をさらに引き出していくとともに、学生が主体的に学修していけるように授業の内容もブラッシュアップしていきたい。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
保健体育	板井美浩	選択	1,4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

- ◎ 「学生による授業評価表」は回収率0%だった。
- ◎ 「科目独自の出席カード」への記入率は100%で回収でき、下記のような意見が多かった。
  - ・ 体育の本質は、スポーツ技術の優劣（できばえ）だけではないことが理解できた。
  - ・ 多数の履修者（約100名）で活動するための振舞い方が理解できた。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

「体を育てる」ことが体育の重要な役割の一つであるが、信頼関係を「体で育む」こと、すなわち体を通じて自己と他者の理解を深めることがその先にある体育であると考え、毎回授業の中で説明し、実践を結びつけるよう働きかけた。

「科目独自の出席カード」の記入内容から、ほとんどの学生が上記のことを理解していることがわかった。

### 3. 教育方法の評価

多数の履修者（約100名）があるため、大勢でできる運動・スポーツを提供し、ルールについても科目独自の工夫を加え、全員が安全に実施できるよう配慮した。

また、2名の非常勤講師の協力を得ることで、授業安全な実施および授業中に起こる学生の体調変化等への対応が大変向上した。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

看護学部専任の教員の採用を是非ともお願いしたいです。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
スペイン語	今野弘子	選択	1,4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

授業内容をよく復習していた。

質問は少なかったが、ペアあるいはグループでの会話表現の練習に積極性が見られた。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

（目的について）

総合点の成績分布：90 点以上 11 人

80 点以上 3 人

70 点以上 1 人

平均点：86 点

コミュニケーションに必要な基礎的な文法と会話表現がおおむね習得できた。

（目標について）

基礎的な文法や会話表現により重点を置いたため、スペイン語圏の文化への時間配分が十分ではなかった。

### 3. 教育方法の評価

3 回の単元テストの実施は、授業内容の理解度を確認するために有効だった。

練習問題や発展問題を活用し、文法知識の定着を図った。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

動詞活用表のプリントを改良する。

音声の聞き取り（リスニング）問題の活用。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
文化人類学	田中大介	選択	1,4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

授業は基本的に講義形式で行ったが、授業中の態度も非常に熱心で積極的な姿勢であり、また授業終了後の質問も活発であった。履修者の全てで受講態度や内容理解に対する大きな偏りがなく、高い水準にあったと考えられる。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

授業の目的とした設定した「家族と親族、地域社会・共同体・民族などの概念から、わが国の土着の文化を含めた多様な文化への理解を深め、文化の比較を行い、文化人類学を理解する」、そして到達目標として設定した「文化がもつ様々な働きや、思考・行動との関係性を具体的に理解し、患者の多様な受療行動の文化的・社会的背景を見通す視点を習得する」という内容の双方ともに、履修者の意欲的な学びを通じて十分に達成することができた。

### 3. 教育方法の評価

毎回の授業では最後に実践的な主題を盛りこんだ論述課題を行い、履修者が授業内容を振り返るだけでなく、その回答を次回内容にフィードバックして理解の促進を図ることができた。また、講義形式を採ったものの双方向的な議論を重視し、ディスカッションの時間も設けたことにより、より深い学術的知見の摂取につながった。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

授業回数が限られているため、できるだけ充実した知見を盛り込むだけでなく、その取舍選択の指針が必要になる。また、授業内容としては学説史および概論に属する枠組みを主体としているため、多様な問題を集約する何らかのテーマ設定を熟慮することが求められる。次年度以降は授業の全体像とフォーカスを履修者が俯瞰できるような内容をさらに練ることに努め、学生の知的関心をさらに喚起できるような問題を盛り込みたい。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
ジェンダー論	成田伸	選択	1,4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

毎回の講義でMoodle上のコメントシートに、学生の感想・意見の記載を求めた。5点を配点したこともあり、31人の受講生のうち、21名はすべての回について回答を記載した。講義の内容は、ジェンダーに関わる具体的な出来事（妊娠・出産、LGBTQ、男性助産師等）を紹介しており、学生はかなり長い文章で、講義で紹介された状況に対する自らの意見を表明していた。毎回の講義への意見の表明の積み重ねが、講義の課題レポート作成につながっていた。

ただし2名はまったく意見表明がなく、課題レポートでかろうじて合格点に達する状況であり、反応しない学生を早期にみつけ、働きかける必要がある。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

講義毎回の意見表明のなかった2名を除き、ほとんどの学生は目標を達成できたと考える。

### 3. 教育方法の評価

ジェンダーに関わる体験は豊富にあると思われるが、日ごろの生活ではあまり意識化できていない、昨今の学生に対して、ジェンダーに関わる具体的な状況を、動画、新聞記事、本からの引用等で具体的に理解できるように紹介することで、ジェンダーに関わって様々起こっていることを意識化し、理解し、自らの意見表明につながる機会となったと考える。

一方で、学生がジェンダーにさらに関心持ち、自ら学ぶまでは至っていないと考えるので、講義内でその辺への働きかけをすることが今後の課題であろう。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

受講生が自ら資料を探索する行動を、取り入れていきたい。



## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
情報学	関山友子	選択	1,4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

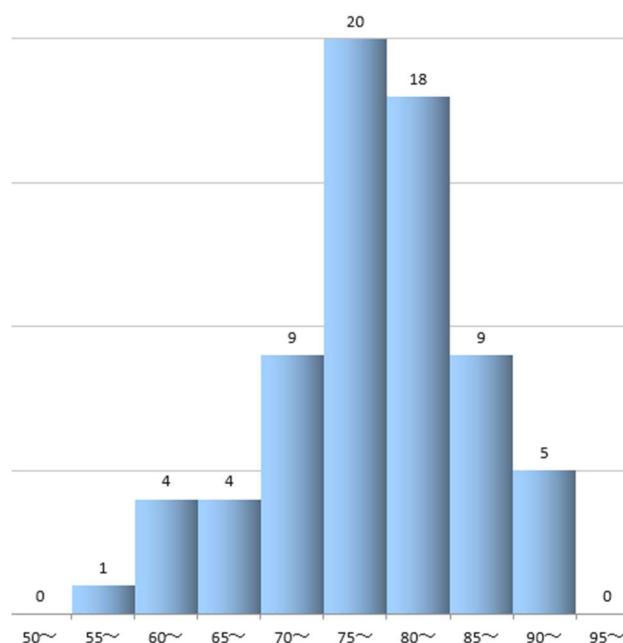
学生による授業科目の評価票の提出は0件であった。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

定期試験 70%、レポート 15%、学習態度 15%で評価した。

定期試験の結果（70名が受験）は、平均点：78.2、標準偏差：7.6、信頼係数：0.450であり、再試者は1名であった。

また、4年次の受講生1名については国家試験の兼ね合いから再試験を受験した。不合格者はいなかった。



### 3. 教育方法の評価

講義の大部分は本大学医学部の教員が担当している。演習については科目責任者が実施している。

生成 AI 等の知識は、2年前の知識が古いといわれるほど急速に変わり続けている。また、学習に必要な文章作成ソフトや表計算ソフト等の知識は卒業高校により差がある。

このような状況に対応しながらも、学習目的の達成が可能な授業を行えていると考える。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

大きな改善はないが、変わり続ける知識の中から今後必要となる知識を選び出し、本科目の学習内容にどう盛り込んでいくかなどといった試行錯誤は続けていく。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
がん看護学	石井容子	選択	2,4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価の提出は 0 件であったが、授業ごとにフィードバックペーパーの提出を学生にしてもらい、授業の感想・学んだこと、授業でよかったこと・改善してほしいこと等を記載してもらっており、学生から特に改善してほしいことや要望等の記載はなかった。授業には、外部講師の方やがんサバイバーの教育支援者の方による講義を複数取り入れており、外部講師や教育支援者による授業に対する学生の反応は、学びを得られたことや将来の自分の看護師像について考える機会となるなど、学生それぞれに学びを得られた内容であった。よって学生の学習活動については特に問題はみられなかった。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目は、「対象ががんを患う意味と、生命・生活への支障・影響を理解し、対象とその家族に必要な看護を学習する。」ことを目的としている。具体的にはがん治療を受ける対象に必要な看護を理解する、がんと共に生きる対象とその家族に必要なケアを理解する、等を目標としている。

授業評価はレポートが 80%、参加態度が 20%であり、成績評価は履修者 64 人中、A 評価が 57 人（89%）、B 評価が 7 人（11%）、C、D 評価が 0 人であった。レポートは、がん看護のテーマをそれぞれが選んで作成するものであり、学生の個々の関心のあるテーマで文献を用いて作成することができていた。また、講義で学んだ内容をきっかけにがん看護に関する関心のあるテーマを掘り下げて記載する学生も多く、評価は全般的により結果であった。よって、目的・目標はおおむね到達できたと考える。

### 3. 教育方法の評価

本授業では、がんの特徴から治療や治療を受ける患者の看護、患者の家族への看護などを扱い、がん看護の理解を目標に授業の計画を組んでいた。がんの症状に関してやがん患者の在宅療養、緩和ケアとエンド・オブ・ライフ・ケアに関しては臨地教員や外部講師に臨床での内容を盛り込んで講義をしていただいた。また、教育支援者として、がんサバイバーの方のインタビューとそれに対する感想や質問による学生と教育支援者との対談の授業も取り入れた。

学生からは、臨床の実際の話聞くことで、看護をより身近に考える機会を得られたという内容や、がん患者やその家族にどのような看護が必要かを理解し、自分が将来看護者になった時にどう看護を提供すればよいか等を考えられたといった感想が多く聞かれた。また、がんサバイバーの方のインタビューの授業では、がんと共に人生を歩む姿を実際の体験者の話を聞くことで、対象者への理解を深め、看護者としての患者さんへの関わりをそれぞれの学生が考える良い機会となった。

これらの授業を受けて学生が提出したレポートは、各自のテーマにそってがんの患者やその家族に必要な看護について等に言及する内容であり、成績評価からも教育方法について適当であったと考える。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

本科目において、学習の目的・目標が到達できたと判断でき、学生の学習活動の問題も特に生じていないため、次年度も同様の内容で継続できると良いと考える。各授業で学生がフィードバックペーパーを記載することで、学生自身が授業での学びを言語化し、整理することができており、学生の理解や学びの状況を把握することもできるため、フィードバックペーパーの活用を継続していく。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
法学（日本国憲法を含む）	田中嘉彦	選択	1,4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

授業中の学生の受講態度は真摯であり、レポートも漏れなく提出がなされた。（なお、「学生による授業科目の評価票」の回答はゼロであった。）

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

「主として市民と国家が関わる公法の領域を中心として、「公正」と「正義」という観点から、法的な思考方法と基本概念を理解しながら、社会生活における法的な問題を考える。」という目標は、おおむね達成された。また、「1. 日本国憲法を中心として、「法」に関する基本的な概念と体系を説明する。2. 社会における「法」の役割と市民が「法」を「解釈すること」の意味について、考えを述べる。3. 医療の領域において「法」がどのように機能して、運用されているのかを説明する。」という目標についても、おおむね達成された。（なお、成績分布は、おおむね優、ないし良であり、可及び不可はゼロであった。）

### 3. 教育方法の評価

看護学を専攻する学生にとって、基礎的な法学の知識を涵養し、日本国憲法に関する正確な理解が得られるよう、詳細なレジユメを配布するとともに、時事的な憲法問題についても情報提供を行った。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

さらに分かりやすい内容、学生の興味関心を喚起する講義を展開するとともに、学生の能動的学修を促しつつ授業を進めてまいりたい。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
へき地の生活と看護	半澤節子	選択	1~4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価の内容からも、また、学生の事前準備に関する資料、課題レポートなどからも、現地演習前の準備、現地での学習活動は十分な到達レベルに達したと評価できる。学習成果の発表会においても、各グループで自身の現地での活動と得られた学びについて、グループメンバーにわかりやすく伝えられていた。これらの状況から、学生は前向きに授業に参加し、必要な学習内容に到達できたと評価される。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

今年度履修したすべての学生について、本科目の目的、目標の到達状況に基づく成績は「優」であった。こうした状況は例年と大きく変わらない。

履修した学生の60%が回答している「学生による授業評価票」をみると、「熱心にプレゼンテーションの準備を行った」「積極的に議論に参加した」「レポートの書き方について習得できた」「プレゼンテーション技術が習得できた」「ディスカッションの技術が習得できた」「教員による課題の選定は適切」「教員による進行は適切」「教員の指導は丁寧でわかりやすい」について、ほとんどの学生が「とてもあてはまる」もしくは「あてはまる」と回答していた。

### 3. 教育方法の評価

「学生による授業評価票」の自由記載をみると、数人の学生による記載が得られた。たとえば、「課題について情報が少し曖昧だった」「ムードル上の課題提出欄がわかりにくい、提出期限に誤りがあった」「紙媒体の情報とムードル上の情報が異なるものがあった」「講義の後、レポート提出まで1週間はとってほしい」「宿泊費補助の増額」など、いくつかの意見があった。

これらの学生の自由記載からも、教育方法、とりわけ学習方法の情報伝達において、改善が必要な点が見られる。そのために、科目責任者、国内担当教員との情報共有を十分に行い、学生に対する情報提供に矛盾がないように、情報提供者のみならず、国内担当教員も確認するよう留意する必要がある。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

国内演習については、夏季および春季の演習日程について時間割上の実習や演習などの兼ね合いを踏まえて設定すること、また、すべての成績評価が3月の教務委員会での審議に間に合うように日程調整することについて、次年度は改善点とする。

国外演習については、早めにモンゴルとの事前連絡調整を進め、8月の渡航の準備をスムーズに行い、安全に渡航ができるようにする。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
助産学概論	川野亜津子	選択	3年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目は「看護実践を積み重ねる過程で専門性を深めていくための基本的な方法を理解する」という目的および目的に準じた3つの到達目標のもと、学習課題を設定し、15時間の講義・演習を展開している。評価方法は最終レポート85%（うち学習態度5%）、講義の事後課題15%としているが、特に事後課題では単元ごとに学生が修得した知識を整理できるようなミニテストやワーク、講義内容をリフレクションできるような課題を提示し、学生の知識がより深まり定着できるように、学習活動を支援した。最終レポートは講義での学びを反芻しながら演習の中でサポートを行い作成し、ルーブリック評価により8割以上の学生がA評価であった。学生は学習活動が円滑に、効果的に行うことができたと評価できる。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

事後課題（学習目的、課題に沿ったミニテストやワーク、講義内容のリフレクションなど）15%、最終レポート85%（うち学習態度5%）にて評価を行い、受講者のうち99%がA評価であった。本科目の目的である「看護実践を積み重ねる過程で専門性を深めていくための基本的な方法を理解する」という目的、および目的に準じた3つの到達目標を概ね達成できたと考える。

### 3. 教育方法の評価

評価方法として最終レポート85%（うち学習態度5%）、事後課題15%としているが、事後課題においては単元ごとに学生が修得した知識を整理できるようなミニテストやワーク、講義内容をリフレクションできるような課題を提示し、学生の知識がより深まり定着できるように、教育方法を工夫した。また講義内容として資料や説明は図やグラフなどを用いて示したり、具体的に知識が深まるように事例を紹介したりなど、学生がイメージしながら知識が定着でき、学んだことを振り返り考えたり、看護へ応用できるように工夫した。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

今年度リアクションペーパーで得た内容を踏まえ、演習（グループワーク）をより効果的に行うこと、学生がより興味を抱く助産学に関連したテーマについてさらに取り入れ、講義内容を充実させたい。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
多職種連携論	塚本友栄	選択	4 年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

選択科目「多職種連家論」を3名が受講した。共通の授業評価票の提出はなかった。

講義・演習時の欠席はなく、事前・事後の課題レポートを全員が遅滞なく提出した。

医学部との合同演習では、退院前カンファレンスを模擬的に開催し、そこでのロールプレイを通して他職種に対して、患者の立場に寄り添いながら、看護職として発言していくことの必要性や難しさ等、実感的な学びが得られており、積極的に学習に取り組んでいた。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

3名全員A評価であり、目標の到達度は高かった。

### 3. 教育方法の評価

4年間で、唯一、かつ初めての他学部との合同演習を取り入れた科目であった。

看護学生のみで展開するグループワークとは異なり、看護学生は各グループに1名のみの配置のため、緊張感をもって取り組んでいた。また、他学部学生と討議することを通して、職種が異なることによる価値観・考え方の違いを実感できていた。模擬的とはいえ、価値観・考え方の異なる職種のなかで、看護師としてどう判断し、発言していくか、どう話し合っていけばいいか、他職種との連携・協働を進めるうえで大切なことは何か、あらためて看護師として大切にすべきことは何かなど、自ずと考えさせられる演習になっていたことが、事後レポートから把握できた。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

今年度をもって本科目は閉講である。

次年度からは、「多職種連携論Ⅱ」が新規開講される。

## 科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
助産学実習	川野亜津子	選択	4年次後学期

### 1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目は「周産期の母子と家族を支援するための助産実践の基礎的技術を習得し、助産業務について説明する」として、6つの到達目標にて教育を行っている。これらの目的や内容に沿って、妊娠期実習、分娩・育児期実習、地域を中心とした実習を展開した。特に分娩介助の経験を確保することが課題であったが、早期からの24時間体制実習を取り入れる等にて実習内容が担保できた。1事例ごとに振り返り、産褥期・退院まで経過を追うなど継続的に理解し学ぶことができていた。学生の意見から、臨床側、教員側からの綿密な指導により、実習で多くのことを学ぶことができた、充実した実習ができた、座学と実践のリンクができたという回答がほぼ全員から得られた。このことから、学生は学習活動が円滑に、効果的に行うことができたと評価できる。

### 2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

助産学実習最終評価表に基づき評価を行い、受講者のうち全員がA評価であった。本科目の目的である「周産期の母子と家族を支援するための助産実践の基礎的技術を習得し、助産業務について説明する」という目的、および目的に準じた6つの到達目標を概ね達成できたと考える。

### 3. 教育方法の評価

評価方法として助産学実習最終評価表に基づき、全体を通じた実習状況、ケース受け持ち実習、実習態度を評価している。受講者のうち全員がA評価であったことから、本科目の目的、目的に準じた6つの到達目標を概ね達成できたと考える。

### 4. 次年度以降に向けた改善策

今年度は分娩介助件数の確保のため、早期より24時間体制実習を行った。来年度も助産実習の夜間実習は避けられないものであることや、体調を整える心身のマネジメント等についての事前アナウンス・指導を強化する。また、夜間実習（分娩待機中）の時にも受け持ちの状態（授乳など）を見たいという学生からの意見があったため、夜間実習の教員配置を工夫し、限られた実習期間内でも学生が多くのことを学べる実習環境が整えられるよう、さらに調整する。また、学生の疲労度やメンタルヘルスへの対応については引き続き、定期的な学生面談や日常での声掛け、臨床側との連携によるフォロー体制をさらに強化する。